

# 大地

18号  
1989. 4. 1  
真宗大谷派  
浄国寺 (23)5724

## 浄国寺本堂基礎修繕 工事について (報告)

記録的な暖冬も、そろそろ終ろうとしております。今年には桜の開花も随分早まりそうな気配ですが、檀信徒の皆様にはお変わりなく御健勝のことお慶び申し上げます。

日ごろより、浄国寺護持のため御援助、御力を頂き誠に有難うございます。

さて、昨年四月の世話会において施工することを決めて頂きました、「浄国寺本堂基礎修繕工事」であります。同年、六月及び八月、九月にかけて施工し、無事完了致しました。

お陰さまで、内部の土台基礎の修繕補強はもちろん、コンクリートの犬走りをめぐる土台廻りの外観も、堅固にすっきりと仕上がりました。

今後引き続き、様子を見ながらお守りしなければならぬことは、既にお知らせした通りであります。これ

で当分は、聞法の道場である本堂を、しっかりと支えてくれるものと思います。皆様方の御厚情に改めて深く感謝申し上げます。本堂基礎修繕工事に関する会計報告は次の通りであります。(詳細については世話会のご承認を得た後に御報告いたします。)

(収入)	
工事修繕基礎基金	1,665,000円
立金積立会持入	1,000,000円
利息預金	12,030円
計	2,677,030円
(支出)	
修繕基礎費	1,849,000円
計	1,849,000円
収支差引	828,030円

修繕費の収支は、幸い大巾な黒字決算となりました。これは、修繕費が当初予算より低くおさえることが出来た事、そして何よりも皆様方の御協力により寄附金が順調に寄せられた事にあります。

黒字金の取扱いについては、四月の世話会において、検討の上本堂維持のため有効に活用する方向で決めて頂く所存であります。

御礼と報告が大変遅くなり、ご心配をおかけ致しましたが、右の通り報告申し上げます。

浄国寺護持会

代表 笠原 真

俳句 七句

山崎 睦

○親も子も 仏具磨きて 盆用意

○大杉の 合間合間の 紅葉かな

○老梅に 薄紅の さしわたり

○玉霰 あられ 思い思いに 跳ね返る

○干し上げし 大根漬けも 年用意

○料亭の つくは 樽踞 つくだ 音もなし

○冬菊の 添え木もろとも 倒れけり

## 仏縁を喜ぶ日々

—九州の空から  
故里を偲ぶ—

福岡県・小郡  
尾崎 秀 男

私が故里を後にしたのは、昭和十年の花見の頃のことでした。父が株に手を出し、家が倒産してしまつたからでした。母と姉の三人で貴寺に立ち寄り仏様を預つて貰つたのですが、その時の奥さんの言葉が、今でも忘れられません。

「お寺はあなた方の自分の家なのだから、いつでも帰つておいでなさい。」  
今になってみると、その後の人生で幾度か苦しいこと辛いことにぶつかった節目に、お寺に行けばよかった、お寺に行つて胸の内を打ち明ければよかったと悔まれます。

さて、その後私はあちこちに預けられました。進学の夢は叶わず、小学校を終えると、東京の荒物問屋に小僧に入り、そこで四年近く務めました。小石川から新宿、板橋、松戸までも自転車にリヤカーをつけて働きました。当時は休みといつても盆、正月のヤブ

入りのみでしたが、そんな時にも私には帰るべき故里の家がありませんでした。

その後、どうにか国鉄に入り、はじめは辛い作業もありましたが刻苦勉強の後、特別功労賞まで頂いたこともあります。越後人の粘りと誠実の故だと思います。しかし管理職になった時、誠実さだけではどうにもならないことに多々ぶつかりました。管理職としては失敗したと思っています。

その頃、妻が心を病み、そしてそれを看ている私も心を病み、退院の時は退職になっていました。

その後義徒兄、佐川清氏の経営する佐川急便に入社しましたが、長時間不規則労働で体を害し、そこを二年でやめ今日に至っています。

昨年は不調続きで床に就くことが多かったのですが、今年春頃から快方に向い床から離れることができました。昨年は床にあって、死を考え過ぎたのかも知れませんが。

これ迄仏教とは祖先を葬っていただけものと思っていました。この頃親鸞聖人、蓮如上人、浄土真宗の本を読んでいると、そうではないのだと、うすうす解ってきました。そして清沢満之、

曾我量深、鈴木大拙各先生の伝え教えられることも解つて来ました。仏縁があつたのだと感謝しています。

板倉町に恵信尼様の御廟所のあること、歎異抄の稲田は越後とばかり思っていたのが常陸であつたことを知り、まだまだ縁が遠いかとも思っています。

私の高野の家になるとお太子さまが、高田から来られ、近辺の人が沢山参られた記憶があります。どうして私の家に来られたのか、お寺とご縁だつたのかと推測してみたりしています。これも歳でしょうか。

当地でも鉛色の雪雲を見ます。天も地も暗い色となる冬、越後は厳しいでしょうが、時としてそれが懐しく感じられます。当地にいても帰るところは越後だと心に決めています。

※ 尾崎秀男さんは、板倉町高野に生をなされた。文中にあるように家が倒産、故郷を後にされました。

若い頃より筆舌しがたい御苦労をさされ、現在、闘病生活をされておられます。しかしその生活を逆縁とされ、信心を深められました。心優しく、お盆と暮には必ず、暖かなお便りと、お志を送って下さいませ。

## 言葉の不思議

山崎 慎子

酒田生れ酒田育ちの私は、十八の年迄当然のこととして酒田弁（庄内弁）の中にどっぷり浸って暮らしていた。たまたま東北弁の圏外に出た時など、方言で話せぬ不便と話さぬ後ろめたさを感じてはいたが、共通語を操ることに、さしたる不都合もなかった。庄内弁を日常の言葉としなくなつて漸く四半世紀になることを思えば感慨も深い。

娘は奈良生れの高田育ち。幼い語いのなかに微かに関西訛のイントネーションを見つけて面白がっていた矢先高田に帰って来たので、まア殆んど純粹の高田育ちといえるだろう。

それは全国的な傾向で、我家の子ども達に限ったことではないが、言葉に対して比較的敏感な娘は、高田弁コンプレックスを訴えることがある。つまり高田弁を自然に操ることができないことに對する引け目である。日本海側の地方都市にあっては珍しく、言葉の癖がとて少ない所だと思ふのだが、

それでもそっくりそのまま共通語というわけではない。そんな中でお年寄りほど豊かな方言を話してくれるが、若い友人同士の会話にも結構ポンポンとび出して来るらしい。そんな時、娘は自然な形で方言を喋られないし、何とか口にしても、とってつけたような不自然さが自分でも落ちつきなく、友人にも笑われるのだという。

その娘が時折私に、庄内弁をせがむ。又、電話での母や姉との会話を傍で聞きながら、感に耐えぬように「あー庄内弁って良いなァー、優しくて良いなァー」と言ってくれる。私自身は故里の言葉を、しみじみ良いとか優しいと思つて話したことも聞いたこともなかったもので、そういう娘の反応に驚きもするし、同時に娘のことがとても好きになる一瞬でもある。

普段は殆んど忘れたように深い所に隠れているような故里の言葉が、ある刺激を受けて突然ほとばしるのは面白いことだ。

たとえば電話。それが故里からの、故里の人からの電話であれば、何の構えもなく切り換えができて忽ち庄内弁で話している。

たとえば学生時代、帰省列車に乗っ

て暫くすると、私の言語回路は思考も会話も全て、庄内弁になつてゐるのに氣付く。そして休みが終つて京都に向う列車に乗り込んで暫くすると、今度は全てが共通語に切り換わるのである。

十数年前、街の中心の半分を焼き尽くす大火が酒田を襲つた時、その火元になつた所は生家から五百メートル程しか離れていなかった。電話はつながらず、ラジオとテレビの伝えるニュースが頼れる唯一の情報という中で、夜半二時頃迄テレビにかじりついたことがあった。テレビが最後のニュースを伝えた時、もう生家は燃えてしまったのだとひどく落胆しながら、私はそのことを盛んに庄内弁でつぶやいていたという。それは後日夫から教えられたことだったのだが、そう伝えられても全く心あたりがないぐらい、全く無意識の内の行為だったのである。それ程、母語というのは、その人の全存在に深く深くくい込んでゐるのかと思つと、何だか不思議な、しかし複雑な感覚でもある。



季ときを聴く

山崎隆昌

「今冬は例年に無く雪が少なかった。(高田では全く無かったに等しい)。  
豪雪を予想し、覚悟していた者にと  
って、いささか拍子抜けの感すらあり  
ます。」

「元々、日本人は季の移りに、自然の  
様変りに深く関りあって来ましたが、  
例えば手紙を書く場合にも必ずと言っ  
て良い程、その枕に時候の挨拶が置か  
れます。日常の会話も「雪が少なく  
良いですね」とか「随分秋らしくなっ  
てきましたね」とかの、季の状態がま  
ず交されます。」

「当地方は、世界でも有数の豪雪地帯  
で、古くから雪に悩まされてきました。  
「雪さえなかつたらなあ」の声をしば  
しば聞くのは、無理からぬことであり  
ましよう。」

「しかし、その豪雪地帯に生活し、雪  
にやり場のない腹立ちを感じる人々も、  
今冬のように全く雪の無い冬には、素  
直に「よかったなあ」と喜べないもの  
があるようです。何かおかしいぞとい  
う不安。」

住井すみゑはその著「牛久沼のほと

り」の中で、述べています。

「冬は寒ければ寒いほど結構だと私は  
思っている。それに又、実際もし暖冬  
などといわれようものなら、それこそ  
凶作の前兆として心配の種になる。同  
じように夏は暑ければ暑いほど幸いで、  
涼夏とか冷夏とかいわれるようでは、  
もう完全にお手あげだ。これが、百姓  
ぐらしをしてきた私の「感覚」である」  
悲しいことに、今は、農業を専業と  
して営んで生活することは本当に難し  
い日本になってしまいました。」

「同じく自分自身をふり返る時、薄ら  
寒く感ずることは、僕自身が、何と自  
然と縁遠くなってしまったのかと思ひ  
知られるのです。」

「忙しい、忙しい」と、自動車で飛  
び回っている僕の目の中には自然の有  
様、季の移りは写りません。路傍の草  
花など気にも止まりません。ただただ  
目前の仕事をやり終えることに汲々と  
している状態です。」

「そのような中でも、例えば、雪消え  
とともに、木々が美しく芽吹く姿や、  
朝焼けに輝く雪景色等に出会うと心が  
洗われます。」

「そして又すぐに、「忙しい、忙しい」  
と心貧しくなる。」

「自然とともに生活された良寛和尚は、  
やまかげの岩間をつたふ苔水の

かすかに我はすみわたるかも  
と詠んでおられます。」

この様な、自然と人間の関係には言葉  
など無用でしょう。」

「ひたすら、自然に耳をかたむける……  
間もなく、暖かな季節です。」

「自然のメッセージを、この身に少しで  
も受けとめてみたいと思うのです。」



後 記

「大地」をお届けします。

発行が随分遅れ申し訳けなく思います。  
今号には、九州尾崎さんより、しみじ  
みとして心打たれるお便りを寄せてい  
ただきました。

「間もなく高田城趾公園の観桜会も始  
まります。頸城平野に春の季節の訪れ  
です。」

